

## 第 2 分 科 会

会場 名古屋クラウンホテル  
5階 「鶴1」

分科会テーマ

### 「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動」

研究発表

- ◆ 神 高 侑 子 香川県中学校体育連盟 運動部活動研究部長  
高松市立下笠居中学校

「生徒による自主的・自発的な学校部活動とは」

- ◆ 小 松 将 大 鹿児島県中学校体育連盟 研究部長  
鹿児島市立天保山中学校

「主体的に運動に取り組み、競技力向上につながる運動部活動の実践」  
～Team 鹿児島 陸上競技専門部と運動部活動との協働的な取組を通して～

紙上発表

- ◆ 内 藤 大 輔 愛知県中小学校体育連盟  
江南市立西部中学校

「子どもの声に寄り添いながら主体性と意欲を育む部活動経営の工夫」  
～ポートフォリオを活用した「軸思考」の育成を通じた地域人材との協働～

指導助言者	(公財)日本中学校体育連盟	副	会	長	金	子	哲	朗
	愛知県中小学校体育連盟	副	会	長	小	田	英	宣
司 会 者	愛知県中小学校体育連盟	副	会	長	尾	崎	佳	孝
運営責任者	愛知大会実行委員会	運	営	部	多	田	智	哉
運 営	愛知大会実行委員会	運	営	部	坂	本	邦	彦
	愛知大会実行委員会	運	営	部	杉	浦	寿	哉
記 録 者	愛知大会実行委員会	編	集	部	酒	井		裕
	愛知大会実行委員会	編	集	部	波	江	寛	之
					野			

## 生徒による自主的・自発的な学校部活動とは

香川県中学校体育連盟 運動部活動研究部長  
高松市立下笠居中学校 神高 侑子

### <提案趣旨>

本県の「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドライン（令和5年3月策定）」には、「学校部活動は（～中略）生徒の自主的・自発的な参加により行われる活動である。」  
「学校部活動は、教員や部活動指導員等の指導の下、生徒が自主的・自発的に活動を組織し、展開することに一つの本質を有しており…。」と記載されている。しかし教員の中に、生徒による自主的・自発的な学校部活動の運営や実践は難しいのではないかという不安感があることが分かった。そこで、今の時代に求められている学校部活動の本質にせまるため、本研究を行った。

### 1 はじめに

香川県中学校体育連盟には、県内7地区からの代表者と、17競技の代表者から構成された部活動研究部がある。この研究部では各地区の実践や課題、部活動の地域展開等に関わる情報交換を行っている。

現在、各地区では、教育委員会主導の地域クラブや拠点校部活動などの取組が、徐々に行われているが、まだまだ、部活動の地域展開に関する問題が山積している。近年では、学校部活動や地域クラブ、拠点校部活動ではない、民間クラブチームが増加していることもあり、大会運営の方法や学校部活動のこれからの在り方について、研究部員の中で話題にあがることも増えてきた。また、より高い技能の習得を目指し、民間クラブチームに所属する生徒も増え、競技によっては大会上位に名前を連ねることも多くなっている。

本研究を進めている期間にも、部活動の地域展開に向けた各地区の取り組みが現在進行形で進んでおり、学校部活動を取り巻く環境は今後大きく変化し続けると考えられる。

### 2 調査・実践内容

#### (1) 事前アンケート調査

< 調査名 > 「自主的・自発的な練習を行っているか」

< 調査時期 > 令和6年7～9月

< 調査対象 > バスケットボール1校、ソフトボール部1校、バレーボール部1校、陸上部2校

< アンケート結果 >

	指導者が練習メニューを決めている割合	部活動時間以外の自主練習の状況（部員数）			
		よく行っている	少し行っている	あまり行っていない	全く行わない
バスケットボール★	100%	0	4	2	1
ソフトボール	75%	1	6	0	0
バレーボール	100%	5	7	4	1
陸上A★	75～100%	7	6	2	1
陸上B	75～100%	2	8	6	0

★印の付いている2チームで、自主練習に関する実践を行った。

(2) 実践内容と報告

①バスケットボール部（部員：7名、顧問：専門1名、専門外1名）

<自主練習>・10～3月：週に1日（毎週火曜日）練習時間は1～1.5時間

- <方法>・メニューは生徒が考え、自主練習ノートに記入する。事前に顧問がチェックする。
- ・自主練習日は、専門外の顧問が部活動を担当する。
  - ・練習後、自主練習の成果と課題をノートに記入し、次回のメニューを考える。

	月	火	水	木	金	土	日
練習内容	全体練習	★自主練	休み	全体練習	全体練習	全体練習 (練習試合)	休み
ノート	ノート 返却	①成果と課題を記入 ②次のメニューを記入		ノート 提出	顧問がチェック アドバイスを記入		

- <成果>・全体練習の中では時間があまり取れない個人技能の練習を行っていた。自分が苦手とする技能の反復練習を行うことができ、それぞれ集中して練習していた。
- ・自分のペースで練習ができるので、練習しながら時間や回数を調整していた。
  - ・普段はシューティングの時間をたっぷり取れないので、自主練習で行っていた。
  - ・インターネット等を活用して、自分で練習メニューを調べてくるようになった。
  - ・自主練習ノートを通して、生徒の疑問や質問に顧問が返答することができた。
  - ・顧問は自主練習日の時間を、部活動以外の業務に充てることができた。

- <課題>・練習メニューの組み立てについては、アドバイスが必要な生徒がいる。
- ・2人で行いたいメニューの場合、誰かに協力してもらう必要があり、メニューの変更が生じた。→生徒の要望を聞いて、教員が調整をしていた。
  - ・家でも実施できそうなメニュー（筋トレなど）は、なるべく自宅で行うように助言したが、生徒のタイプ（性格）にもよるので、最終的には任せていた。

②陸上部A校（部員：16名、顧問：専門1名、専門外1名）

<自主練習>・ハイシーズン：週2日、冬季：週0～1日

- <方法>・生徒の専門種目を個別に練習する。
- ・指導者が個人の課題を考え、メニューを提案する。
  - ・生徒が、外部のクラブやインターネットで探したメニューを、指導者と相談する。
  - ・今年度から希望があれば、学校外の競技場へ移動して、自主練習をする。

- <成果>・自分の専門種目を実施できるので、課題に応じた練習ができた。
- ・生徒自身の体調や疲労度に応じて、柔軟にメニューが変更できた。
  - ・怪我が減少したように感じる。
  - ・競技場でしかできない、専門種目の練習ができていた。（令和7年度）

※競技場の利用について

学校から、自転車で20分程度の距離にある。

生徒の使用料は、1回150円。室内練習場がある。

- < 課題 >・事前に生徒と打ち合わせをしておかないと、練習メニューを考えるとところから始まり、効率が悪い。
- ・陸上競技では、自分の限界に挑戦する練習が必要となり、中学生の自主的な練習だけでは、なかなか成果があがりにくい。

③団体競技（球技）1校について（顧問：専門外2名、外部コーチ1名）

上記2校に加え、週に1度の自主練習を实践しようとしたチームがあったが、途中で断念することとなった。理由としては、以下の通りである。

- ・顧問が種目の専門外であることから、生徒が自主練習で行っていることについて、具体的なアドバイスや助言ができなかった。
- ・部員間に技能の個人差がある。初心者の生徒にとっては自分のペースで練習ができる技能向上の時間になったが、経験者の生徒には物足りない時間になっていた。

(3) 事後アンケート調査

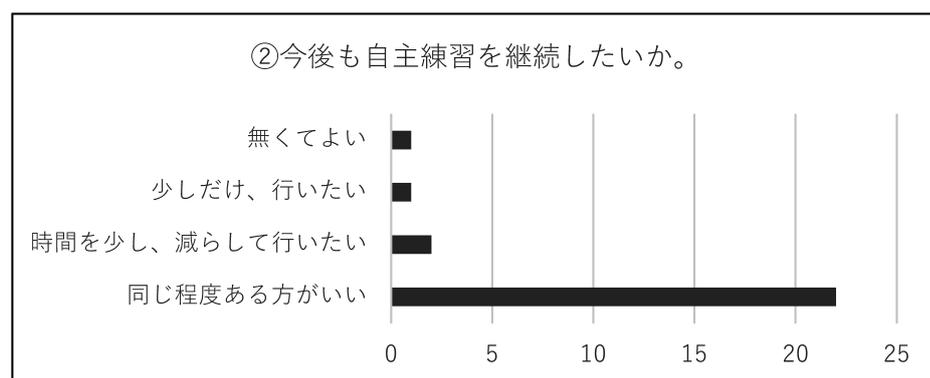
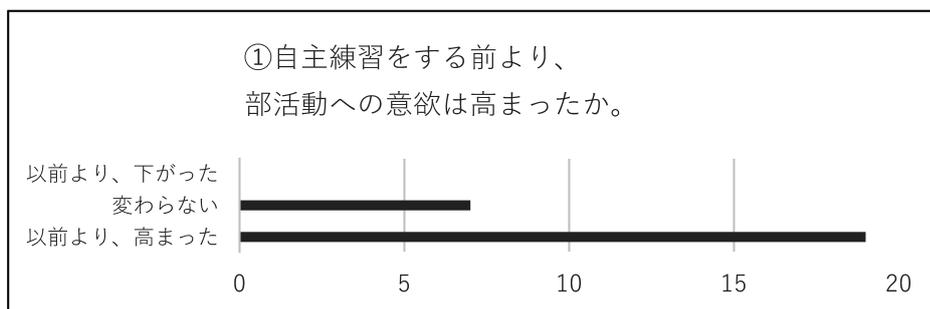
<調査時期>令和7年7、8月

<調査対象>自主練習実践校（バスケットボール部、陸上部A校）

<アンケート結果>

①生徒

【調査名】 「部活動への意欲が高まったか、自主練習を継続したいか」



- < 成果 >・自分のペースで、自分のやりたい練習ができた。
- ・自分で決めたから、最後までやりきろうと思えた。
- < 課題 >・本当に上手くなっているか（速くなっているか）心配だった。

## <アンケート結果>

### ②顧問

【調査名】「自主的な部活動、意欲を高める部活動について」（自由記述）

#### ア. バスケットボール部顧問

- ・初めは、生徒が自主練習で何をしたいかわからず、全体練習の中からやりたいメニューを選んでしたが、徐々に自分の課題を考え、練習を組み立てるようになった。顧問の考えたメニューではなく、インターネットや本で練習メニューを調べてくることも増えた。
- ・試合や実践練習の中で、自主練習してきたことが発揮でき、自分の上達を実感したときの生徒の嬉しそうな表情が印象的であった。試合の勝ち負けではない、達成感を得られていた。
- ・部活動ガイドラインが定着した今だからこそ、全体練習ばかりだけでなく、個で活動できる時間をあえて作ることも、意欲を高める時間として必要だと感じた。

#### イ. 陸上部A校顧問

- ・陸上競技の特性により、種目に分かれて練習する方が、生徒にとっても効率が良い様子であった。
- ・目標が自分で定められるようになると、さらに高いレベルで自主練習が行えると思う。
- ・生徒が混乱したり、悩んだりすることは、「自主的な活動」の過程に必要。待つことや見守ることが指導者側の課題であると感じる。
- ・言われてやるよりも、自分がやりたいと思ったことをする方が意欲は高まる。しかし、自分自身への負荷がかけきれていない。生徒が自ら選んだと感じられるように、指導者の仕掛け、配慮が必要ではないか。

## 4 研究のまとめ

○「週1程度の自主練習、生徒の自主的・自発的な参加、活動と展開」を実践し、少ない時間でも、生徒に任せることの意味は十分にあると感じた。今後、可能な限り広げていければと考えている。

→意欲の向上、生徒の主体性や勝ち負けではない達成感が生まれる。

○練習メニューだけでなく、練習日程や時間、オフシーズンの設定、代表選手の選出なども、生徒が主体となって部活動の運営に携わることも可能かもしれない。

●自主的・自発的な活動が、競技力向上につながっているかどうかは今後の課題である。

●実践校③のような事例から、指導者の専門性の重要性を検証していく必要がある。（本県令和4年度調査では公立中学校運動部活動顧問の6割が、自分の専門外の顧問をしていることが分かっている。）

### 具体的な今後の課題

学校部活動の目指すところ、指導者の専門性の重要性、民間クラブチームとの違いの明確化

スポーツを通して、豊かな心や健やかな体を育むことは、運動部活動における大切な意義である。指導者と生徒が意見を交わしながら目標や目的を設定し、ともに部活動を創り上げていくことが、今の学校部活動に求められていることではないだろうか。また、学校部活動で育んだ自主的、自発的な姿勢が、学校生活の向上につながっている生徒もいるだろう。今後も日本中体連の方針を注視しつつ、今、目の前にいる生徒の心と体の育成に努める部活動を運営できるよう、今後も研究と実践を進めていきたい。

# 主体的に運動に取り組み、競技力向上につながる運動部活動の実践

～Team 鹿児島 陸上競技専門部と運動部活動との協働的な取組を通して～

鹿児島県中学校体育連盟 研究部長

鹿児島市立天保山中学校 小松将大

## 〈提案趣旨〉

近年、少子化の進行による生徒数の減少や、教員の負担増大に伴う専門指導者の不足が深刻化し、各学校単位での運動部活動の実践が困難な状況にある。特に陸上競技のように専門性の高い種目では、質の高い指導環境の確保が課題となっている。

運動部活動は、生徒の心身の健全な発達や競争意識・仲間意識の醸成に大きな意義を有する。しかしながら、現状では学校単独での対応には限界があり、「個」ではなく「県全体」で部活動を支える仕組みが求められている。そこで、専門性の高い指導者を中核とした鹿児島県陸上競技専門部の中に強化部を設置し対応を試みている。これにより、生徒の競技力向上と主体的な活動の促進、学校・教員の負担軽減、地域全体での陸上競技の底辺拡大が期待される。

本取組は、少子化や指導者不足という構造的課題を乗り越え、「県全体で次世代を育てる」新たな部活動支援モデルを構築するものであり、他の競技への横展開も可能な先導的取組である。また、単なる競技力向上に留まらず、少子化や指導者不足といった教育現場の課題の解決にも貢献するものでもある。将来にわたって子どもたちがスポーツに親しむ機会を確保するため、強化部の設置により、「県全体で次世代を育てる」新たな部活動支援モデルを構築したい。将来的には他の競技にもこのモデルを展開することで、鹿児島県全体のスポーツ環境の充実につなげていきたいと考えている。

以上を踏まえ、鹿児島県陸上競技専門部と鹿児島市の拠点校部活動の取組の実践を報告したい。

## 1 はじめに

### (1) 研究の仮説

各競技種目の専門の指導者が中心になって組織している「陸上競技専門部」の様々な取組が、競技力向上だけでなく、陸上競技専門外の顧問への部活動指導のサポートに少なからず貢献していると考えている。

そこで、拠点校部活動を実施した後のアンケート調査から教職員が抱える外部委託への課題を見つけ、陸上競技専門部の取組が、今後他の競技の部活動指導においても有効な手立てとなるのではないだろうか。

### (2) 研究の方法

ア 研究期間：令和2年度～令和7年度（継続中）

イ 研究対象：陸上部、またはクラブチーム所属生徒

ウ 研究方法：

- (ア) 部活動数・生徒数・競技力の推移の把握
- (イ) 陸上競技専門部を中心とした実践内容をまとめる
- (ウ) 生徒・顧問・指導者を対象としたアンケート調査

## 2 研究の計画と内容

### (1) 計画

- ア これまでの鹿児島県陸上競技専門部が行ってきた取組を振り返る。(過去5年分)
- イ 練習会や冬季合宿の実践が競技力向上に繋がっているかを確認する。(過去3年分)
- ウ 令和2年度から実施しているリモートコントロールテストの分析。(過去分)
- エ 生徒(中学生・高校生)・指導者(学校・クラブチーム)へのアンケート調査

### (2) 内容

- ア 陸上競技専門部の実践事項の分析
- イ コントロールテストに関する考察
- ウ 拠点校部活動校における実施後の分析(アンケート調査から)

## 3 研究の実践と考察

### (1) 専門部の組織化と役割分担

現在、鹿児島県中体連陸上専門部は総務・強化・庶務会計・競技審判記録情報・広報に部署を分けて活動している。中でも強化部は「練習会」「冬季合宿」の計画立案を行っている。

また、強化部のメンバーを種目毎のスタッフに分けて、短距離・長距離・ハードル・走高跳・棒高跳・走幅跳・三段跳・投擲のスタッフ構成を作り活動している。

専門部のスタッフは、中体連所属の教員に加え、クラブチームの指導者や小学校教諭、現役選手、中体連の練習会や冬季合宿に参加経験のあるOB・OG等、多様な人材で構成されている。様々な指導者からの視点で生徒たちを指導することができるので、陸上専門の指導者がいる学校の生徒であっても新たな気づきを得ることができたり、専門種目外の指導のポイントを指導者同士で情報交換ができていたりしており、鹿児島県全体の指導者のレベルアップにも繋がっている。

総務部	氏名	所属	業務内容	
総務部	金澤 宏弥	吾平	企画・運営・立案	☆九州・全国 担当 九州:田中 全国:横瀬田 ・現地底務(支援スタッフ) 今後決定
	中浦 莉太	皇徳寺	各業者との連携 スタッフとの連携	
	原田 達也	鹿大附属	諸事項の協議及び確認	
強化部	氏名	所属	業務内容	
強化部	倉津 怜也	東谷山	○強化計画・強化スタッフとの連携	☆U16大会 担当 担当:今後決定 ・申込、輸送、現地底務 ・名鉄観光(益田)と連携
	豊留 雅也	南指宿	○練習会・合宿 企画立案	
	田中 惇朗	隼人	・練習会統括(日程・会場・ねらい確認)	
	小松 莉大	天保山	・練習会案内(form作成・HP)	
	別府 翔太	高尾野	・練習会当日計画	
	松下 綾乃	川内北	・練習会計画(強化部底務と連携)	
	池田 徳貴	星峯	・合宿統括	
	上岡 洋輔	日当山		
	田畑 祥	大川内		
	吉岡 一樹	吉野		
	平田 丈	川内南		
	大戸 一朗	帖佐		
			☆冬季合宿担当(○倉津)	
			○強化部担当	
			※他のスタッフは後日入選	

【各ブロックの組織図】

短距離 統括 小松 男子 小松 女子 齋藤	◎○小松 将大	天保山	長距離 男子 男女統括 中道	◎中道 将太	豊後寺	ハードル	◎平田 丈	川内南	走幅跳・三段跳	◎上岡 洋輔	日当山
	○齋藤 健吾	帖佐		○別府 翔太	高尾野		○山口 光秀	吉野東		○山下 真	国分
	勇島 海斗	花城小		江口 敬弘	重富		中川 毅	伊集院		藤山 久亮	西紫原
	河野 美月	牧之原		古田 健太郎	出水		棟原 和馬	附属小		大迫 拓輝	宇都
	上笠 峰雄	Join AC		前原 成明	松元		山口 優明	金久		小田原 秀樹	出水
	豊留 雅也	南指宿		渡邊田 卓	城西		倉津 怜也	東谷山		吉村 孝作	吹上
	坂元 莉歩	東谷山		宇都 邦和	細山田		倉房 樹	田代小		下田 啓介	鹿大附属
	高木 優紀	坂元台小		水波 薫平	大口中央		下村 謙希			諏訪原 香織	鹿児島Jr
	中瀬 陽平	岸良学園		弓削 佑太	谷山						
	田中 智大	重富小									
高中 智哉	伊敷台	◎田中 博期	華人	走高跳	◎原田 達也	鹿大附属	投擲	◎大戸 一朗	帖佐		
大西 克広	鶴輪	○松下 綾乃	川内北		○山中 亮磨	鹿大特別支援		○田畑 祥	大川内		
		三嶋 正登	伊敷台		渡邊 順彦	鹿屋東		吉岡 一樹	吉野		
		中島 信一郎	高尾野		住本 真一郎	萩丘		有村 慎太郎	skyone		
		今村 晋一朗	鴨池		坂口 圭々美	東谷山小		河野 孝志	舞鶴		
		下室園 慎太郎	大口中央		丸山 千夏	伊敷台		日下田 良	RICOH		
		奈 藤平	末吉								
		曾田 陽菜子	玉江小		◎麻生 貴宣						
					山口 光秀	吉野東					

(2) 合同練習会の実施

年間5～7回の練習会を実施し強化・普及に取り組んでいる。時期によって、1年生を対象に100mと1000mを測定する会や九州・全国大会に出場する選手を選抜して各種目の専門のスタッフに細かな指導を受けられる回など、目的に応じた練習会を開催している。また、陸上競技専門ではない教員が顧問をしている場合には、専門のスタッフが指導をしているところを見学できるようにしている。そこで、練習をする上でのポイント等を学ぶことができる機会を設けている。

一方、毎年行なっている冬季選抜合宿では、短距離・長距離・跳躍・投擲・ハードルブロックからキャプテンを選出して、鹿児島県全体で次のシーズンに向かう気持ち作りも競技力向上と同時に行なっている。この合宿で学んだ知識やレベルの高い練習の行い方や環境づくりをそれぞれのチームに持ち帰り、選抜された選手だけでなく、それぞれの学校でより高いレベルの練習ができるようなサイクル作りを行なっている。

<p><b>練習会参加者</b></p> <p>令和5年度：2,038人（6回開催）</p> <p>令和6年度：883人（4回開催）</p> <p>令和7年度：1,125人（4回開催：10月末現在）</p>
---



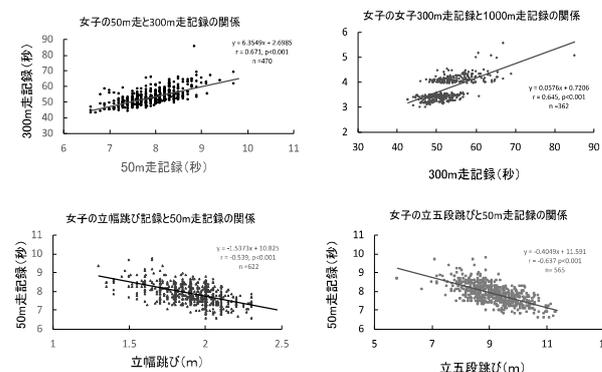
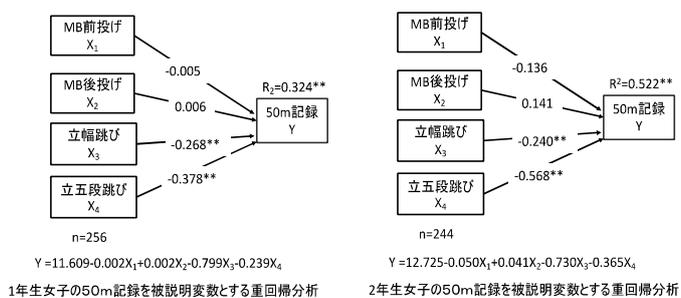
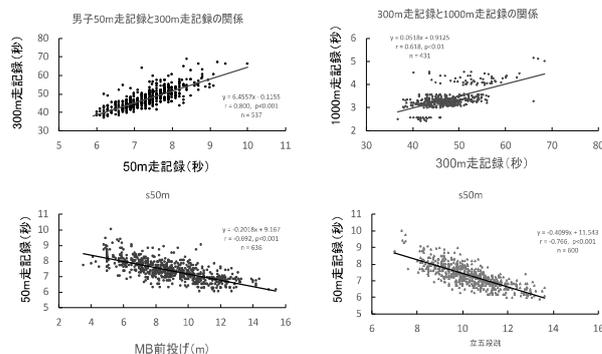
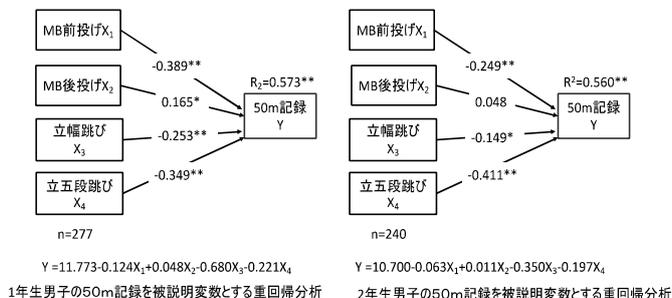
(3) リモートコントロールテスト

鹿児島県陸上競技専門部では、10～11月の合同練習会の際にコントロールテストの実施を行っていた。

しかし、コロナ禍で県内各地から集まった練習ができないことや大会も開催することができない時期が続いたため、令和2年度から各学校で記録を取り、専門部で集計したデータを鹿児島陸上競技協会のホームページにランキング形式で掲載し、子どもたちの競技力の向上やモチベーションを落とさないための工夫を行った。コロナ禍が収束した現在も、県内のライバルとの記録比較や、過去の上位者の記録を参考に自己の練習に生かす等の利点があることから、この取組は継続している。コントロールテストは、毎年11月～2月にかけて行っている。コントロールテストの実施種目は、50m走、300m走、1000m走、メディスンボール投げ（フロント・バック（男：3kg、

女：2kg)、立ち幅跳び、立ち5段跳びの7種目を実施している。

このコントロールテストの結果を鹿児島大学教育学部保健体育科に分析を依頼したところ、男子の50m走の記録にはメディシンボールの前投げと立ち5段跳びに優位に相関があり、女子の50m走の記録には立ち幅跳びと立ち5段跳びに優位に相関があることが分かった。中体連で行ったコントロールテストの分析についても大学機関に依頼し、根拠を持って各学校の練習に取り組むことができるように様々な方に協力をもらっている。

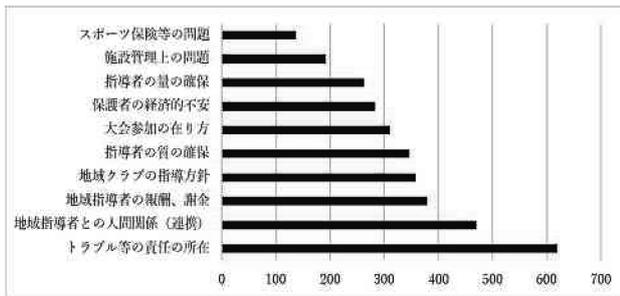


#### (4) 拠点校部活動としての取組（鹿児島市モデル事業）

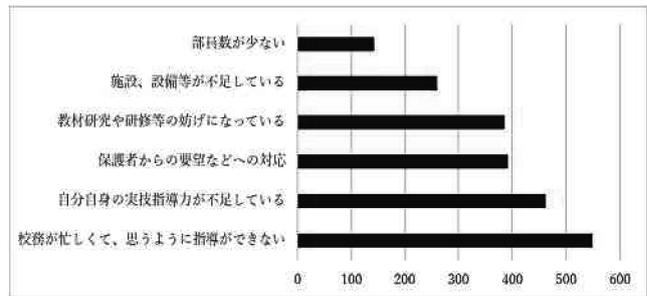
鹿児島市では、令和6年度から部活動の地域展開のモデル事業を行っている。その中の鹿児島市立天保山中学校では、近隣の3校の陸上部員が休日の部活動に参加する形を取っている。3つの学校のうち、2つの学校に陸上専門の顧問が在籍し、鹿児島大学の学生も指導に加わった。天保山中学校では、休日の部活動を複数校の生徒で行う形を取っている。

一方、ある練習では指導者が2人であったのに対し、参加生徒が増加し、拠点校の指導者の負担が増えるという面もあった。しかし、専門の指導者がいない学校の生徒たちからの感想にはポジティブな意見が多く、拠点校で部活動を実施する意義はある。今後の課題として、指導者の確保や各学校の連携を図るコーディネーターの確保が必要だと感じる。教職員に行ったアンケート結果からは、部活動の顧問をしても自身の指導力不足や学校の業務への負担になっているという意見が多数あったが、地域展開をした場合の課題として「トラブル等に関する責任の所在」が多くあった。現状のまま地域展開を進めた場合、かえって業務負担が増えるのではないかと考える教職員が多いことが分かった。

Q11. 休日の部活動が地域に移行された場合、課題になると思うものは何ですか。



Q4. 部活動指導において、「問題・課題」と感じている点は何ですか。



## 4 研究の成果

### (1) 本県部活動の実態と競技力の推移

#### ・ 全国大会標準記録突破者の推移

令和4年度：30人（全国大会入賞者：4人・九州大会3位以内：19種目）

令和5年度：37人（全国大会入賞者：4人・九州大会台風の為中止）

令和6年度：41人（全国大会入賞者：6人・九州大会3位以内：19種目）

令和7年度：29人（全国大会入賞者：3人・九州大会3位以内：15種目）

※（全国標準記録更新）



今年度全国大会優勝 男子走高跳 迫田大輝

## 5 今後の課題

本取組は、専門部主導の合同練習会・リモートコントロールテスト・拠点校部活動を通じて競技力向上と指導者負担軽減に一定の成果を上げているが、持続的・発展的な展開には以下の課題が残されている。

### (1) 指導者確保と負担軽減の両立

専門部スタッフは教員・クラブ指導者・OB・OGなど多様な人材で構成されているが、参加はボランティアを基盤とした。合同練習会や冬季合宿の企画・運営には膨大な準備・調整が必要であり、指導者の過重負担が懸念される。

### (2) 部活動の地域展開に伴う責任と連携の明確化

アンケート結果から、教職員の約半数が「トラブル等に関する責任の所在」を地域展開の最大の課題と回答している。専門部が中心となって活動を支えるモデルは有効だが、法的責任、保険、保護者対応などの体制が未整備である。また、拠点校と参加校間の情報共有・調整を担うコーディネーターの不在が、連携の課題となっている。

### (3) データ活用と科学的検証の深化

コントロールテストの相関分析（鹿児島大学・丸山教授）は有用だが、競技力向上の因果関係や同一人物の追跡調査をすることでより明確な成果や課題が発見される。また、その分析結果を基に、練習会参加者への講習会を実施する必要もある。

# 子どもの声に寄り添いながら主体性と意欲を育む部活動経営の工夫

～ポートフォリオを活用した「軸思考」の育成を通じた地域人材との協働～

愛知県中小学校体育連盟

江南市立西部中学校 内藤 大輔

## <提案趣旨>

近年、「Well-being」の概念が広く認知され、第4期教育振興基本計画にもその重要性が述べられている。一方、AIの進展に象徴される変化の激しい社会状況下で、子どもたちが「人間らしく生きる力」と「自ら学び続ける力」を育むことが、いっそう求められている。子どもたちが変化にしなやかに対応し、Well-beingを実現しながら未来を切り拓くには、自ら目標をもち、挑戦を継続する姿勢（意欲）の育成が不可欠である。

教育活動の一環としての部活動は、「なりたい自分の姿」を描き、その実現に向けて努力する過程を通して、主体性や自己決定力を育む貴重な場である。本研究は、こうした教育的意義を再確認し、生徒の声に寄り添いながら主体性と意欲を育む部活動経営の在り方を探ってきた実践である。

## 1 はじめに

中学校学習指導要領には、部活動に関する記述として「生徒の自主的・自発的な参加により行われる部活動」が明記されており、「多様な生徒のニーズに配慮すること」「学校教育の一環として教育活動との関連を図ること」「地域の人々や社会教育関係団体等との連携により、持続可能な運営体制を整えること」などの留意事項が示されている。これらを踏まえ、保健体育科教員として培ってきた授業実践を基盤に、「する・見る・支える・知る」という多面的なスポーツとの関わり方の視点を取り入れた部活動指導や、振り返りの記録を活用した個別支援などを通して、教育活動の一環としての部活動運営の在り方を見直してきた。生徒一人一人がより意欲的に取り組める部活動をめざし、令和8年8月に予定されている愛知県江南市の部活動地域展開施策を見据えながら、顧問教員と部員生徒との関係性を地域へ開き、地域の大人と生徒をつなぐ部活動の在り方を模索してきた。

以下に、これまでの取組と成果の概要を示す。

### (1) 目指す生徒像

「なりたい自分の姿」をイメージし、その実現に向けて主体的・意欲的に部活動に取り組む生徒

### (2) 研究の仮説

生徒の声に寄り添い、ニーズの把握と地域との連携環境を整えることで、主体的・意欲的に部活動に取り組む生徒の育成につながるであろう。

### (3) 研究の方法

① 研究期間 令和5年度～令和7年度（継続中）

② 研究対象 女子ソフトテニス部 生徒

③ 部活動での取組

ア 軸思考の推進    イ 生徒のニーズの把握    ウ 多様な地域人材と関わる機会の設定

## 2 研究の計画と内容

### (1) 「枠内思考」から「軸思考」へのシフトチェンジ

指示に従うだけの「枠内思考」から、身に付けた知識・技能・経験・価値観を基に自らの「軸」を形成し、他者との関わりを通してその軸をさらに強めていく「軸思考」への転換を促すため、活動内容や思考の過程を記録するポートフォリオノート（以下、テニスノート）を活用した。

ノートの構成は、「①基礎技能ルーブリック表」「②ルーブリック表と照らし合わせながら自己評価するスキルチェック表」「③自身の行動や思考過程を可視化する自由記述式の振り返り欄」の3項目である。①および②は、試合でのパフォーマンスを保護者が撮影の動画で確認しながら技能の定着を自己評価する際の視点として用い、自己の技能レベルの把握や目標設定の明確化をねらいとした。③の自由記述欄は、単なる試合の反省にとどまらず、好きなスポーツに打ち込む中で生まれる生徒の願いや思いを書き留める場として位置づけた。これにより、生徒一人一人のニーズや悩みを把握する手立てとするとともに、教員の返信コメントを通して、生徒が自らの考えを見つめ直し「軸思考」を育むきっかけとなるよう工夫した。

### (2) 仲間同士の関わりや多様な地域人材との連携を広げる

運動部活動の地域移行検討委員会の委員として施策の推進に携わる中で、地域展開の課題や今後の部活動の在り方について議論を重ねてきた。学校関係者や地域代表など、多様な立場の大人たちが集う委員会では、立場の違いから意見が分かれる場面もあったが、共通して確認されたのは、他校の生徒同士や地域の大人たちと生徒を段階的・計画的につないでいく必要性であった。

この点を踏まえ、本実践の部活動運営においても、仲間との対話的な関わりや多様な地域人材との連携を意図的に広げ、主体的・意欲的に取り組む生徒の育成を目指した。学習指導要領が示す「教育活動との関連を図る」という趣旨を意識し、保健体育科の授業で取り入れている対話的な学びを部活動にも導入した。生徒同士が練習の中で掴んだ「コツ」を伝え合ったり、仲間から助言を受けたりする場面を設け、互いの考えや価値観に触れながら成長を支え合う雰囲気や育つようにした。さらに、在校生の保護者や卒業生、地域クラブを運営する指導者など、地域の多様な大人たちと連携し、部活動指導への協力体制の拡充を図った。外部指導者が生徒と関わる際には、事前に生徒へ「指導者が伝えたいことを掴み、軸思考で自分の幅を広げよう」と確認し、指導者には「自分が大切にしてきたことや経験を率直に伝えてほしい」と依頼した。

このように、多様な地域人材との関わりを意図的に設定し、さまざまな指導理念や方法に触れる経験そのものが、生徒の「軸」を太くし、成長を促す重要な要素であると考え、積極的に外部との交流の場を設けた。

## 3 研究の実際と考察

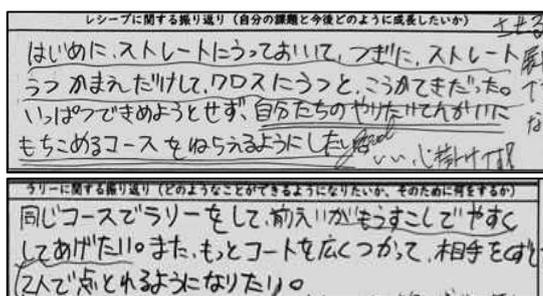
### (1) 対話的な学びと軸思考を促す実践の実際と考察

軸思考を促すためには、まず、自分にどのような知識や技能が身に付き、どのような経験を積んできたのかを自己認知することが重要である。そのため、テニスノートに「MY SKILL CHECK」と称したルーブリック評価表（資料1）を添付し、明確な視点をもって自己の実態を把握できるよう工夫した。また、「サービス」「レシーブ」「ラリー中」の3つのプレー場面に焦点を当てた自由記述の振り返り欄を設けた。

ラリー中（状況に応じて優先順位を決めてプレーしよう）	
<input type="checkbox"/>	高い打点の時にしっかりと足を使ってコースに打つことができる。
<input type="checkbox"/>	相手が動かないとどれないコースを狙って打つことができる。
<input type="checkbox"/>	バックを徹底的に狙って打つことができる。
<input type="checkbox"/>	相手に角度をつけた返球ができないように工夫できる。
<input type="checkbox"/>	ロビングで相手を動かすことができる。
<input type="checkbox"/>	同じコースでラリーができる。
<input type="checkbox"/>	困ったらロビングでしのぐことができる。

【資料1：MY SKILL CHECKの一部抜粋】

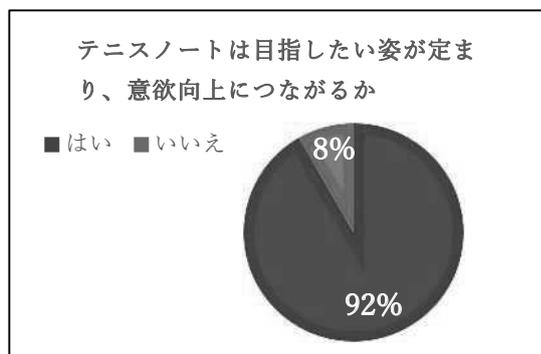
当初は、うまくいかなかったことに焦点を当てた自己否定的な記述が多く見られた。そこで、生徒が「～したい」「～になりたい」といった未来志向の表現で振り返りをまとめるよう例示した。その結果、練習場面での対話や教員コメント欄でのやり取りを通じて、生徒たちは自分のプレーを分析し、目指すプレースタイルを具体的に描こうとするようになり、肯定的な記述へと変化していった(資料2)。



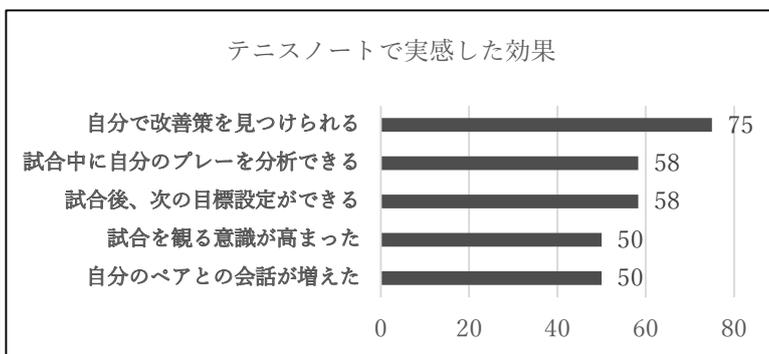
【資料2：生徒の振り返り記述】

テニスノートの活用は、生徒一人一人の思考過程を可視化し、成長実感が高めることに寄与した。また、教員にとっても、生徒の率直な声や思いに耳を傾け、個々のニーズに応じた指導に反映する貴重な手立てとなった。さらに、部活動における仲間同士の対話的な場面の設定や軸思考の考え方が浸透するにつれ、生徒たちは自ずと自分の考えを他者と共有する意義に気付き、ダブルスのペアとのコミュニケーションを積極的に取るようになった。

テニスノートの活用をより効果的にするため、部員生徒にアンケートを実施した結果、92%の生徒が「目標設定や意欲向上に効果的であった」と回答した(資料3)。また、「自分のプレーの改善点を見つけられる(75%)」「試合中に自分のプレーを分析できる(58%)」「試合後に、目標設定ができる(58%)」などの効果を実感していることが分かった(資料4)。これらの結果から、生徒たちは自らの課題を的確に捉え、活動中も「今の自分にできること」を考えながら取り組む姿勢が定着してきたことが示唆される。テニスノートによる自己分析と対話的な学びの循環が、軸思考の育成と活動意欲の向上に効果的に働いていると考えられる。



【資料3：テニスノートが意欲に与える効



【資料4：生徒が実感したテニスノートの効果の内容】

## (2) 多様な地域人材との連携についての実際と考察

生徒たちと地域をつなぐために、卒業生や保護者、地域大会の審判員、地域クラブの指導者、クラブ運営に携わる地域の協働パートナーなど、幅広いネットワーク構築に努めた。これらの協力者は、生徒の健全育成に貢献したいという思いから無償で関わっており、平日・休日を問わず学校に来校して指導にあたっている。

各協力者はそれぞれの専門性を生かし、基礎的な技能からポジションごとの専門的スキルまで、個々の生徒の課題に応じて丁寧に支援している。また、生徒が抱える悩みや課題に対しては、対話的な関わりを通して心理的なサポートを行う場面も見られた(資料5)。

さらに、高いレベルを目指す生徒には、地域指導者の紹介により、他の地域クラブが主催する研修大会への参加や実業団プレイ



【資料5：技術指導する地域指導者】

ヤーからの助言を受ける機会も設けた。このように、地域のつながりが新たな協働を生み、学びの輪が広がっている。生徒へのアンケート結果からは、全ての生徒が地域との関わりを通して「技能向上」「意欲向上」のいずれにも効果を感じていた。また、地域の指導者と関わることの利点として、「専門的な視点で助言がもらえる」「細やかな指導を受けられる」「質問しやすい雰囲気になる」「高い技能を身近に感じられる」「自分のプレーを見てもらえる」など、多様な肯定的評価が得られた。

これらの結果から、生徒たちは地域の大人との関わりを通して、多様な価値観や考え方を柔軟に吸収し、自らの成長課題を主体的に捉えるようになってきていることが示唆される。地域の協働体制の拡充が、生徒の学びへの意欲と自己成長意識を高める重要な要因として機能していると考えられる。

#### 4 研究の成果

本研究を通して、生徒たちが「なりたい自分の姿」を明確にイメージし、その実現に向けて主体的・意欲的に部活動に取り組む姿が見られたことは、大きな成果である。また、生徒が新たな学びの環境を求めている実態を把握できたことも重要な示唆といえる。

生徒の感想からは、すべての生徒が、多様な経験をもつ地域の指導者や協働パートナーから、より広く学びたいという記述が見られ、これまでの地域との連携が生徒に肯定的に受け止められていることがうかがえた。さらに、学校部活動にとどまらず、民間クラブや江南市地域クラブへの参加、各種研修大会への参加を前向きに希望する生徒も増えていることから、自らの可能性を広げようとする意欲的な姿勢が高まっていることが明らかとなった。これらの成果は、地域との協働による部活動運営が、生徒の自己成長意識や学びへのモチベーションを高める有効な手立てとなり得ることを示している。

#### 5 今後の課題

本研究を通じて、生徒の「もっと成長したい」という思いに寄り添いながら、学習指導要領の「学校の教育活動との関連を図る」という趣旨を踏まえ、保健体育科の授業で実践している対話的な学びやポートフォリオ型の振り返りノートの活用を部活動にも取り入れた。そのことで、生徒が自分の課題を明確にし、具体的なイメージをもって活動に取り組めるよう支援してきた。その結果、生徒一人一人の声に丁寧に耳を傾けることの大切さを改めて実感することができた。

一方で、近年の生徒を取り巻く環境やニーズは多様化しており、単に「上手になりたい」「技能を高めたい」という競技志向だけでなく、健康づくりや仲間との交流を重視するなど、活動への目的や価値観もさまざまである。こうした多様な動機をもつ生徒一人一人が、部活動を通して自分なりの意欲を見だし、それを持続できるよう支援することが、今後の重要な課題である。

また、家庭や地域の在り方も変化しており、コロナ禍以降は家庭での時間を大切にしている傾向が強まり、保護者自身が子どもの活動に関わりたいと考えるケースも見られるようになった。こうした保護者や地域の思いを理解し、学校としてどのように連携を図りながら生徒の意欲を支えていくかも、今後の検討課題である。

これからの部活動経営には、生徒一人一人が自分の目標や活動の意味を自覚し、仲間や指導者とそれを共有しながら取り組める仕組みづくりが求められる。そのためには、日々の練習や振り返りを通して「できた」「成長した」という実感を積み重ねられる環境を整え、生徒が自ら意欲を高めていける経営を目指す必要がある。今後も、子どもの健全な成長を願う多くの地域の大人たちとの出会いに感謝しつつ、学校・家庭・地域がそれぞれの立場から子どもの意欲を育むことができるよう、探究と実践を続けていきたい。